教職課程受講学生の持つ「教えることに関する信念」と「よい授業に関する信念（授業観）」との関連について

藤田 正（奈良教育大学 教育学部，fujita.tadashi.ea@cc.nara-edu.ac.jp）
林 龍平（関西福祉科学大学 教育学部，hayashi@tamateyama.ac.jp）
﨑濱 秀行（阪南大学 経済学部，sakihama@hannan-u.ac.jp）

Relationships between beliefs about learning of teaching and beliefs about effective teaching and learning in pre-service teachers

Tadashi Fujita (School of Education, Nara University of Education, Japan)
Rywhay Hayashi (School of Education, Kansai University of Welfare Sciences, Japan)
Hideyuki Sakihama (School of Economics, Hannan University, Japan)

Abstract

This study aimed to examine the relationships between the beliefs about how to learn or acquire teaching skills (beliefs about learning of teaching) and beliefs about effective teaching of teaching students. In total, 151 undergraduate students taking a professional teaching course participated. They answered two kinds of questionnaires: beliefs about learning of teaching and about effective teaching. Results showed three significant positive correlations between the necessity of learning teaching methods at university and active student participation during class, between how to learn teaching and active student participation during class, and between necessity of learning teaching methods at university and teachers' competence in teaching and learning. The findings suggest that students who believe it was necessary to learn how to teach at university also believed in the importance of active student participation during class. The study also suggests that some students made much of learning teaching at university and acquiring competence in teaching and learning for effective teaching.

Key words

beliefs of pre-service teachers about learning of teaching, beliefs of pre-service teachers about effective teaching and learning, necessity of learning teaching methods at university, active participation of students during class, teachers' competence in teaching and learning

1. 問題と目的

教育実践では、実践者である教師の教育実践に関する知識や信念が、その教師の実践の在り方を方向付けている。それ故に、教師がどのような信念を持っているのか、それはどのような過程を経て形成されたのか、さらに、どのような条件が信念の変容に影響するのかなどを明らかにすることは、より効果的な教育実践の在り方や効果的な教員研修の在り方を考えるうえで極めて重要だと考えられる（林・﨑濱・藤田，2023）。このような視点に立ってこれまでに数多くの教師や教職課程で学ぶ学生の信念研究が行われ、そこからさまざまな知見が導かれてきた（Fives, Lacatena, & Gerard, 2014; Kagan, 1992; Pajares, 1992；秋田，1993；藤木，2000）。

そうした教師や将来教師を目指す者が持つ信念や、その発達に関する研究で明らかとなったのは、教師の信念が彼らの教師としてのキャリアが始まって以降に形作られるのではなく、彼らが教職課程の履修を始める以前から既に存在しているらしいということ（Holt-Reynolds, 1992; Joram & Gabriele, 1998）や、教職課程を受講し始める時点で彼らが持っている信念の中身が彼らの受講する教育内容の受け止め方に違いをもたらすということだった（Yerrick, Parke, & Nugent, 1997）。これらの研究結果が示唆するのは、教職課程のプログラムを構成する上で教職課程履修学生が教育に関して有している種々の既存信念の特徴を明らかにしておくことが極めて重要であるということである（林他，2023）。

そこでこれまで筆者らは、将来教師を志望する学生（以下、「教職課程履修学生」）や現職教員が教育実践に関連して持つと思われる信念のうちの「児童・生徒観（児童・生徒とはどのような存在かに関する考え方）」、「学習指導行動観（自分が将来教師になった時に取るだろう学習指導行動についての考え方）」、「授業観（よい授業はどんな特徴を持っているのかについての考え方）」、等の種々の教育的信念の特徴について検討を重ねてきた（﨑濱・林・藤田，2016；林・藤田・﨑濱，2016；林・﨑濱・藤田，2020; 林・﨑濱・藤田，2021）。

その結果、教職課程履修学生の持つ「児童・生徒観」は、「学習指導性」「自律性」「自己統制性」の 3 側面からなること、他方「学習指導行動観」は「学習指導行動」という 1 側面からなっていること、そして、児童・生徒中心の児童・生徒観を持つ者ほど児童・生徒中心的な学習指導行動を重視すること等が明らかにされた（﨑濱他，2016）。また、教職課程履修学生、現職教員ともに児童・

生徒中心的な学習指導行動や児童・生徒の自律性を重視する点では違いはないものの、その重視度合いには違いがあり、現職教員は児童・生徒中心的な学習指導行動をより重視する傾向が、他方教職課程履修学生は児童・生徒の自律性をより重視する傾向のあることが明らかにされた（林他, 2016）。さらにまた、教職課程履修学生が持つ「児童・生徒観」（特にそのうちの学習指導性）や「学習指導行動観」と関係が深いと思われる「授業観（よい授業に関する信念）」を検討した研究の結果をみると、彼らの授業観が「児童・生徒の積極的関与」および「（効果的な知識獲得につながる）教師の力量」の 2 側面からなること、そして両者には強い相関（$r = 0.77$）があること（林他, 2020; 2021）等が見出された。これらの結果は、教職履修学生が、「児童・生徒が主体的・積極的に関わることができて、その結果、児童・生徒自身で新しい知識を獲得することができる授業こそがよい授業であり、それを担保するのは教師の力量である」と考えていることを示唆するものだった。

さらに筆者らは、上述の「児童・生徒観」、「学習指導行動観」、「授業観」に加えて、教職課程履修学生が児童・生徒中心的な学習指導を教室で具現化するのに必要な理論や技法をどこでどのような方法で身に付けるのがよいと考えているのかという信念（「教え方に関する信念」）についても検討してきた。このような信念を検討する契機となったのは、米国で行われた種々の調査結果を踏まえて「米国の教職課程履修学生は、教え方を修得するための手段や将来教職に就くに当たって学んでおくべき事柄に関して以下に挙げるような 4 つの信念を持っている可能性がある」とした Joram & Gabriele（1998）による指摘だった。すなわち教え方を学ぶ必要があるのかに関する下位信念として、①「これまでの就学経験を通じて学んだり教えたりすることについてはよく知っているので、それは少しも難しいことではない」という「学習過程に関する自己の持つ知識への過信」とも言える信念、教え方を学ぶ必要があるとすればそれはどこでどのように身につけるべきかに関する下位信念として、②「大学での座学は将来教員を目指す者に価値のあることをほとんど何も提供していないので学生をもっと現場に出すべきだ」という「強い現場志向」とも言える信念、③「昔、自分が習った先生のやり方を真似ることで自分もよい先生になることができる」という「過去の経験重視」とも言える信念、そして、将来教職に就くための準備として何を学んでおくべきかに関する信念として、④「児童・生徒に知識を伝えればよい学習指導はそれほど難しくなく、むしろ難しいのは上手な教室経営の方だ」という「知識伝達としての学習観と教室経営に関する知識偏好」とも言える信念の 4 つである。

そこで筆者らは、これら 4 つの下位信念に関連すると思われる質問項目からなる「教えることに関する信念尺度」を開発し実施することで、日本の教職課程履修学生が米国の教職課程履修学生と同様に持つかもしれない「教え方を修得するための手段および何を習得しておくべきかに関する信念」の構造について検討してみた（林他, 2023; 崎濱・藤田・林, 2021）。その結果、日本の教職課程履修学生が持つ「教えることに関する信念」は、「大学で教え方を学ぶ必要性」、「教えることの学び方」、「児童生徒との直接的な接し方」の 3 下位信念からなることが示された。これら 3 つのうち、1 つ目の「大学で教え方を学ぶ必要性」は Joram & Gabriele（1998）の挙げた「学習過程に関する自己の持つ知識への過信」に相当する信念、2 つ目の「教えることの学び方」は Joram & Gabriele（1998）の挙げた「強い現場志向」や「過去の経験重視」に相当する信念、そして 3 つ目の「児童生徒との直接的な接し方」は Joram & Gabriele（1998）の挙げた「知識伝達としての学習観と教室経営に関する知識への偏好」に類するものの、学んでおくべき事柄として「学級経営」よりも生徒との接し方を重視すべきだとする信念だと解することができ、日本の教職課程履修学生においても Joram & Gabriele（1998）が米国の学生が持つのかもしれないとしたのと類似の信念が認められることが明らかになった。

さらに、先に紹介した信念の構造を検討するために開発された「児童・生徒観尺度」や「学習指導行動尺度」の各側面と「教えることに関する信念尺度」で測られた「教え方を修得するための手段に関する信念」とがどのように関連しているのかについても検討してみたところ、児童・生徒観中の学習指導についての考え方において児童・生徒中心的な考え方を持つ者ほど、また将来の学習指導場面において自分は児童・生徒中心的な学習指導行動を行うだろうと考えている者ほど、大学で教授法についての知識や技法を学ぶ必要性を重視していること（林・崎濱・藤田, 2022; 崎濱・林・藤田, 2022）が明らかにされた。

では、もう 1 つの信念である「授業観」すなわち、よい授業とはどんな授業なのかについての考え方と、教え方をどこでどのような方法で身につけるべきなのかという考え方である「教え方についての信念」とはどのような関係にあるのだろうか。この点についてはこれまでまだ十分な検討が行えないままであった。そこで本研究では、先述の教職課程履修学生が持つ信念のうちの「教え方を修得するための手段に関する信念」と「よい授業」についての信念との関連性について「教えることに関する信念尺度」と「授業観尺度」とを用いて検討することにした。

2. 方法

2.1 参加者

関西地方在住の大学生 163 名が調査対象者として本研究に参加した。調査結果を分析する段階で 12 名の結果に性別に関する選択肢の記入における不備が見られたため最終的に 151 名（男性 62 名、女性 89 名、平均年齢は、男性 19.53 歳、女性 19.54 歳）分の結果を分析対象とした。

2.2 材料

2.2.1 改良版教えることに関する信念尺度

教え方を修得するための手段や将来教職に就くに当

表 1：「改良版教えることに関する信念」尺度構成項目

1. 教えることはそれほど難しいことではないので、そのための授業を大学で用意する必要はないと思う。(①)
2. これまで教わる経験をたくさんしてきているので、大学で教え方について学ぶ必要はないと思う。(①)
3. 児童生徒をどう教えるかは、自分がこれまでに出会った教師の中から良いモデルを見つけて、それをまねればうまくいくと思う。(② & ③)
4. 教え方について大学でその授業を受けるよりも、これまでの自分の教えられた経験を振り返る方が良いと思う。(② & ③)
5. 大学では、教え方について学ぶ時間よりも生徒との接し方や理解の仕方を学ぶ時間を多くすべきだ。(④)
6. 教え方は、大学で学ぶよりも小学校や中学校で実際に児童生徒を教えている先生から学ぶ方が得るものが多いと思う。(① & ④)

注：各質問項目の後ろの括弧内の数字は Joram & Gabriele（1998）で想定された①から④の各下位信念のどれに相当するのかを示している。①「学習過程に関する自己の持つ知識への過信」、②「強い現場志向」、③「過去の経験重視」、④「知識伝達としての学習観と教室経営に関する知識偏好」。

たって学んでおくべき事柄に関する参加者の考え方を調べるために崎濱ら（2021）が作成した「改良版教えることに関する信念尺度」が用いられた（項目の詳細は表 1 参照）。この尺度は上述のように「大学で教え方について学ぶ必要性」（項目 1 と 2）、「教えることの学び方」（項目 3 と 4）、「児童生徒との直接的な接し方」（項目 5 と 6）の 3 つの下位信念から成るもので、すべての下位信念はそれぞれ 2 項目で測定するように構成されていた。なお、この質問紙における項目 1 と項目 2 は、評定された得点が高くなるほど否定的な意味合いになるので、分析に際しては肯定的な意味になるように逆転して得点化されていた。表 1 は、この尺度の各質問項目とそれぞれが Joram & Gabriele（1998）の想定した下位信念のどれに相当するのかを示したものである。

2.2.2 改良版授業観尺度

よい授業とはどのような特徴を持つ授業なのかについての参加者の考え方を調べるために林他（2021）が作成した 28 項目からなる「改良版授業観尺度」を用いた。この尺度は「児童生徒の積極的関与」と「教師の力量」の 2 つの下位信念から成るものであった。前者は、「ただ覚えるだけでなく，考えることのできる授業」、「教師中心でなく、児童･生徒中心の授業」、「教師がしゃべらず、児童･生徒が参加できる授業」、「児童・生徒どうしでコミュニケーションがとれる授業」などの 16 項目によって測定され、後者は、「学習内容を児童・生徒が分かるように伝える授業」、「教師の話す速さが適切な授業」、「教師に新しい知識を教わることができる授業」、「知らないことを学べる授業」、「自らの知識を増やすことができる授業」など 12 項目によって測定されるように構成されていた。

2.3 手続き

調査は web にて行われた。調査実施にあたっては、心理学関係の授業で調査参加の呼びかけを行い、本調査に同意をした者だけが回答するよう求めた。いずれの尺度についても、各項目について 1（まったくあてはまらない）～4（非常によくあてはまる）の 4 件法で評定させた。なお、回答に際しては個人の参加意思を尊重し、強制ではなく、授業の成績とは関係ないことを伝えることで倫理的な配慮を行った。回答した者については同意したものと見なした。

3. 結果

得られたデータについて、SPSS Ver.27.0 を用いて尺度間の関連を検討することにした。尺度間の関連を検討するためピアソンの積率相関係数を算出した。表 2 はその結果を示している。

表 2：尺度間の相関係数

	授業観	
教えることに関する信念	児童生徒の積極的関与	教師の力量
大学で教え方について学ぶ必要性	.38**	.36**
教えることの学び方	.30**	.14
児童生徒との直接的な接し方	–.05	–.04

注：** $p < .01$。

3.1 「教えることに関する信念尺度」と「授業観尺度」との関係について

教えることに関する信念尺度の中の「大学で教え方について学ぶ必要性」因子と授業観尺度の中の「児童生徒の積極的関与」因子との間に有意な正の相関があった（$r = 0.38, p < .01$）。

また教えることに関する信念尺度の中の「教えることの学び方」因子と授業観尺度の中の「児童生徒の積極的関与」因子の間に有意な正の相関が見られた（$r = 0.30, p < .01$）。さらに、教えることに関する信念尺度の中の「大学で教え方について学ぶ必要性」因子と授業観尺度の中の「教師の力量」因子との間にも有意な正の相関が見られた（$r = 0.36, p < .01$）。

以上の分析に加えて、「教えることに関する信念」の下位尺度間の相関についても検討してみたところ，「大学で教え方について学ぶ必要性」と「児童生徒との直接的な接し方」の間に有意な負の相関（$r = –.40, p < .01$）が、他方、「教えることの学び方」と「児童生徒との直接的な接し方」の間に有意な正の相関（$r = .29, p < .01$）が見られた。

4. 考察

教えることに関する信念尺度の中の「大学で教え方について学ぶ必要性」因子と授業観尺度の中の「児童生徒の積極的関与」因子との間の有意な正の相関は、大学で教え方を学ぶ必要性があると考えている者ほど児童生徒が積極的に関与できる授業がよい授業だと考えているこ

とを示唆しており、さらに「大学で教え方について学ぶ必要性」因子と授業観尺度の中の「教師の力量」因子との間にも有意な正の相関があったことから、大学で教え方について学ぶことの必要性を感じている者ほど、よい授業の実現には教師の力量が重要だと考えていたことを示唆していたと言える。

また教えることに関する信念尺度の中の「教えることの学び方」因子と授業観尺度の中の「児童生徒の積極的関与」因子との間の有意な正の相関は、自分がこれまで出会った教師の中から良いモデルを見つけて真似ると良いと考えている者ほど、児童生徒が積極的に関与できる授業がよい授業だと考えていることが示唆された。

これらの結果は、教員養成課程での教え方についての学びを通じて、学生の中に「よい授業の条件とは、児童生徒が積極的に関われることであり、それには教師がしっかりとした力量を備えていることが大事だ」という信念が形作られるのかもしれないという可能性を示唆するものだった。では、そうした教師の力量はどこで身につけられるのかと言えば、それは大学での学びよりも実際の学校現場での体験や過去に自分たちが受けてきた教授体験を参考にすべきだという信念を持っているのかもしれないことも同時に示唆された。

本研究で得られた以上のような結果は、Joram & Gabriele（1998）が米国の教員養成課程で学ぶ学生が有するのかもしれないとして挙げた「大学での座学は将来教員を目指す者に価値のあることをほとんど何も提供していないので学生をもっと現場に出すべきだ」という信念のうちの「強い現場志向」の部分、および「よい先生になるには、昔、自分が習った先生のやり方を真似るのが一番だ」というような「過去の経験重視」というような信念については、日本の教員養成課程で学ぶ学生も共有しているものの、「大学での座学は将来教員を目指す者に価値のあることをほとんど何も提供していない」と思うほど大学での学びを軽視している訳ではないことを示唆していたと言えるだろう。

また「教えることに関する信念」の下位尺度間での相関について分析してみたところ、「大学で教え方について学ぶ必要性」と「児童生徒との直接的な接し方」の間に有意な負の相関（$r = -.40, p < .01$）が、他方「教えることの学び方」と「児童生徒との直接的な接し方」の間に有意な正の相関（$r = .29, p < .01$）が見られたことは以下のようなことを示唆していたと言える。すなわち、教えることに関して学ぶべき事柄として「児童生徒との直接的な接し方」を重視している学生ほど大学での学びをあまり重視していないこと、そして「児童生徒との直接的な接し方」を重視している学生ほど、教え方を学ぶ手掛かりとなるのはこれまで小学校や中学校、高等学校で受けてきた教授経験だと考えているようだということである

これらの結果は、将来教職に就くに先立って学んでおくべき大事な内容が「児童生徒との直接的な接し方」だと考えている学生ほど大学での学びよりも現場での直接的な体験や過去に自分が受けた教授経験を参考とする方がよいと考えていることを示唆しており、これらの結果もまたJoram & Gabriele（1998）が米国の教員養成課程で学ぶ学生が有するのかもしれないとして挙げたいくつかの信念、すなわち「強い現場志向」や「過去の経験重視」と類似の信念を日本の教員養成課程で学ぶ学生も持っていることを示唆していたと言える。

また、以上のような結果は、児童・生徒中心の児童・生徒観や児童・生徒中心の学習指導行動を重視する学生ほど大学で教え方を学ぶ必要性を重視していることを示した林・崎濱・藤田（2022）や崎濱他（2021）の研究結果とも一致していた。

本研究の結果から明らかになったように、良い授業という観点に立った場合、良い授業を構成する内容に応じて、大学での学びを希望する場合と、現場の教師より直接教えてもらうものを希望する場合とに分かれていると言える。つまり、実践に結びつく基礎的な理論、指導観などについては大学教員より基礎から最新理論までを学ぶのが適切であるし、具体的な実践例については教育実習や事前指導・事後指導の際に現場の教師より直接指導を受けるのが適切であると思われる。換言すれば、大学での教え方に関する理論と技術を教育心理学や教育方法などの教職の基礎原理科目や各教科に関する講義や演習を通して教師としての基礎的な力量を修得することと同時に、教育現場の教師から学校での実践についての理論と技術を学び、教え・学ぶ対象である児童・生徒と交流することで実践的な教える力を修得していく事が大事だということだろう。大学での基礎・基本的教授理論と現場での実践に基づき積み重ねられた教授方法との往還こそが大切になってくる。

本研究の結果は、教えることに関して大学での授業デザインと、教育実習の現場での具体的な指導展開の内容について検討するヒントにはなるものと思われる。Joram & Gabriele（1998）の研究で、教員志望学生が持つことが指摘されてきた、大学で教えることを学ぶことは必要ないという信念について日本の学生の状況について明らかにした。我々の結果では、学生たちが完全に大学で教えることを学ぶ必要がないとは意識していないことが明らかになった。さらに児童・生徒中心的な良い授業を行うという要因と関連させて検討した場合には、むしろ大学で児童・生徒中心的な教え方を学ぶことの必要性を考えていることが明らかにされた。この点は、教員養成プログラムを計画・実施する過程で参考にできる内容である。授業の中で学生が求める教えることの理論と技法の内容に関して期待する内容の授業を提供することが最大の課題になって来る。これまでの我々の研究（藤田・林・崎濱，2022）でも、学年進行につれて大学で教えることに関する授業に対する必要性が低下していることが示されている結果を考慮した場合、大学の授業や教育実習の体験、また学年進行に伴い教育実践の場に触れる機会も多くなってくることを考慮し、授業展開の時期の検討や、授業内容をより実践的なものとすることを検討することでより効果的なカリキュラム構成になってくると思われる。

以上のように本研究の結果は、教員志望学生の持つ教えることに関する信念について、良い授業（授業観）との関連性から検討し得られたものである。これまでの教員養成プログラムでの教え方に関する信念からプログラムの基本的な構成要素に関して客観的なデータから検討したもので意義のあるものと思われる。

引用文献

秋田喜代美（1993）．教師の知識と思考に関する研究動向．東京大学教育学部紀要，32，221-232.

Fives, H., Lacatena, N., and Gerard, L. (2014). Teachers' beliefs about teaching (and learning). In H. Fives & M. G. Gill, (eds.). *International handbook of research on teachers' beliefs* (pp. 249-265, Chap. 14). New York: Routledge.

藤木和巳（2000）．実践的な教師教育研究の動向と教師の信念体系．教育実践学研究，2，59-68.

藤田正・林龍平・崎濱秀行（2022）．教職志望学生の教えることに関する信念の変容の検討―教職科目受講前後の信念の変容についての学年間比較―．日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集，214.

林龍平・藤田正・崎濱秀行（2016）．現職教員および教員志望学生の児童・生徒観および指導行動に関する研究（2）―現職教員を中心とした検討―．大阪教育大学紀要（教育科学編），65（1），123-133.

林龍平・崎濱秀行・藤田正（2020）．現職教員および教員志望学生の有する授業観の構造についての検討．総合福祉科学研究，11，17-24.

林龍平・崎濱秀行・藤田正（2021）．教員志望学生の授業観に関する信念の検討（1）―改良版尺度作成および構造の検討―．日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集，229.

林龍平・崎濱秀行・藤田正（2022）．教員志望学生の教えることに関する信念と学習指導行動との関連の検討．日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集，216.

林龍平・崎濱秀行・藤田正（2023）．「教えることに関する信念」の構造の検討．総合福祉科学研究，14，19-31.

Holt-Reynolds, D. (1992). Personal history-based beliefs as relevant prior knowledge in course work. *American Educational Research Journal*, 29, 325-349.

Joram, E. & Gabriele, A. J. (1998). Preservice teachers' prior beliefs: Transforming obstacles into opportunities. *Teaching and Teacher Education*, 14, 175-191.

Kagan, D. M. (1992). Implications of research on teacher belief. *Educational Psychologist*, 27 (1), 65-90.

Pajares, M. F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: Cleaning up a messy construct. *Journal of Educational Research*, 62, 307-332.

崎濱秀行・林龍平・藤田正（2016）．現職教員と教員志望学生の児童・生徒観および学習指導行動に関する研究（1）―児童・生徒観および学習指導行動に関する尺度の作成―．大阪教育大学紀要（教育科学編），64（2），85-92.

崎濱秀行・藤田正・林龍平（2021）．教員志望学生の教えることに関する信念の検討（4）－改良版尺度作成および構造の検討―．日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集，228.

崎濱秀行・林龍平・藤田正（2022）．教員志望学生の教えることに関する信念と児童・生徒観との関連の検討．日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集，215.

Yerrick, R., Parke, H., & Nugent, J. (1997). Struggling to promote deeply rooted change: The "filtering effect" of teachers 'beliefs on understanding transformational views of teaching science. *Science Education*, 81, 137-159.

受稿日 : 2023 年 12 月 26 日
受理日 : 2024 年 3 月 9 日
発行日 : 2024 年 6 月 30 日

Copyright © 2024 Society for Human Environmental Studies

This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.

https://doi.org/10.4189/shes.22.31